

アウシュヴィッツに消えた若きユダヤ人指導者 アーロン・メンツァー

伊藤 富雄

目次

はじめに

1. オーストリアに於けるユダヤ人の状況
2. 子供時代から青年時代
3. 「青少年アリヤー」での活動
4. 「青少年アリヤー」の指導者へ
5. 終焉に向かって

おわりに

はじめに

1943年8月24日、3歳から14歳のユダヤ人の子供たち1260名がハンガリーからチェコのテレージエンシュタットのゲットーへ送られてきた。テレージエンシュタットは1941年から1945年にかけて、西ヨーロッパからユダヤ人たちをアウシュヴィッツ絶滅収容所へ移送する中継地の役割を果たしていた。戦争終結までに約14万人のユダヤ人がテレージエンシュタットに送られ、その内の約3万人がこの町で死亡し、約8万人がアウシュヴィッツをはじめとする絶滅収容所へ移送されている。すし詰め列車での長旅ですっかり疲れ果て、かつ非常に怯えた様子の子供たちの面倒をみるようにと、同収容所のユダヤ人囚人たちの中から医師や看護婦などが選び出された。その際に、一人の若いユダヤ人囚人のアーロン・メンツァーは自発的に子供たちの世話係を引き受けた。彼は子供たちのしゃべるイディッシュ語ができたからだった。しかしながら子供たちの到着から二ヶ月もたたない10月5日、53名の世話係および子供たち全員はテレージエンシュタットからさらに東部へ移送された。そしてアウシュヴィッツ絶滅収容所へ到着した11月7日、全員が即刻ガス室送りとなり、殺害された。こうしてウィーンを中心にユダヤ人青少年たちの有能な指導者として活躍していたアーロン・メンツァーは26歳の短い生涯を終えたのだった¹⁾。

1. オーストリアに於けるユダヤ人の状況

アーロン・メンツァーはオーストリアの首都ウィーンに住んでいたユダヤ人の一人だった。その彼がユダヤ人青少年たちの指導者となり、テレージエンシュタットから最後はアウシュヴィッツ絶滅収容所へ送られ、殺害されるに至った経緯を追う前に、まずはオーストリアに於けるユダヤ人の状況を見ておくことにしよう。

ハプスブルク帝国の領土内で暮っていたユダヤ人たちは、何世紀にも渡って「神の殺害者」、「金の亡者」と見なされ、キリスト教社会の片隅に生きてきた。

第一次世界大戦が勃発すると、帝国の東部地域から数万のユダヤ人がロシア軍の脅威から逃れてウィーンへやってきた。しかしながらオーストリア・ハンガリー二重帝国の敗北が明白になるにつれ、ユダヤ人亡命者に対する雰囲気はますます敵対的になり、帝国の崩壊後、「東部ユダヤ人」は経済的、社会的不幸の元凶だと誹謗され、反ユダヤ主義が高まった。

亡命ユダヤ人の中には多くの子供や青少年も含まれていた。1915年には6歳から17歳の約2万5千名の子供や青少年が東部のガリシアやブコヴィナからウィーンへ逃れてきていた。²⁾ 彼らの大半は厳しい経済的・社会的環境の中で生活し、集団的な反ユダヤ主義の下で苦しんだ。1914年に7歳で両親と共にウィーンに逃れてきた少女は後にこう述べている：

「私たちユダヤ人はどこでも締め出された忍耐の人、根なし草の人、ないしは追放された人間なのです。でも今では私には答えが分かっています。私たちが帰属している、と言える土地へ行かねばならないのだと。何故ならその土地が私たちの父親だからです。」³⁾

ウィーン大学で学んだ彼女の父親は、アーリア人社会へ受け入れられる可能性はあり、反ユダヤ主義も間もなく終焉すると考えていたが、彼女はユダヤ人の同化は不可能だと見なしていた：

「人は、自分がもはやそこは結びついていないと感じれば、宗教共同体から抜け出すことは可能だし、ある民族の所属を解消することも可能です。しかしながら生まれつき属している運命共同体から抜け出すことはできないのです。」⁴⁾

東部から逃れてきた多数のユダヤ人青少年たちが世紀転換期に創設されていたウィーンのユダヤ人青少年組織に加入することで、本来は非政治的だったユダヤ人青少年組織は独自の文化的、イデオロギー的活動を展開することとなり、1918年以降、シオニズムへ向うようになった。それには1917年にイギリスの外相が、パレスティナにユダヤ人の国家を創設する、と発言した事も大きな影響を与えている。それによってパレスティナ建設の可能性が現実味を帯びてきたからである。

それまではシオニズムの理念、すなわちパレスティナにユダヤ人独自の国家を創造する、という理念はユダヤ人の間には僅かな信奉者しか得られていなかった。因みにシオニズムの提唱者であるテオドーア・ヘルツルはウィーンに住んでいた。

第一次世界大戦後に強まったオーストリアの反ユダヤ主義は1938年3月12日のドイツ国防軍によるオーストリア進駐によって劇的な展開を見せた。公然たるユダヤ人迫害（ポグロム）が開始され

たのである。ユダヤ人商店の窓ガラスやショーウィンドーが打ち破られ、ユダヤ人たちは突撃隊やヒトラー・ユーゲント、カギ十字の腕章を付けた男たちによって捕らえられ、殴られ、侮辱され、さらにはタワシや歯ブラシで道路などの清掃を強要された。

家宅搜索の口実で制服姿のナチ党員や市民たちがユダヤ人の家に押し入り、現金、宝石、その他の価値ある品物を奪っていった。こうした略奪の一部はあらかじめ用意されていたリストに従って行なわれた。⁵⁾

昼日中からユダヤ人商店が襲われ、略奪されるのも日常茶飯事だった。小さな商店も大きなデパートも同様に襲撃された。

一方で合法的な「アーリア化」も開始された。多数のオーストリア人が私服を肥やすチャンスを利用し、いわゆる「代理の管理者」としてユダヤ人の会社や商店を手に入れた。この「代理の管理者」は「併合」後の最初の数週間だけで約2万5千名にもものぼった、という。⁶⁾ そうした「代理の管理者」の関心は略奪することだけであり、経営に必要な専門知識などもなく、すぐにそうしたユダヤ人の会社や商店は破綻に向かった。またユダヤ人たちが自分の会社や商店を譲り渡す場合には、実際の価格よりもはるかに低い価格で売却せざるを得なかった。またその売却収益も売り手であるユダヤ人の思うようにはならなかった。何故なら売却で得られた代金は自由に引き出すことのできない閉鎖口座に振り込まれたからだった。またそうしたユダヤ人が国外移住する際には「帝国逃亡税」、「ユダヤ人財産破棄」などの名目で口座から引き落とされたのだった。こうしてユダヤ人は閉鎖口座での僅かな金利しか手にすることができなかった。

「併合」から数週間後にはユダヤ人を公の、文化的、経済的生活から排除する法的措置も取られた。3月15日にはユダヤ人の地方・国家公務員は「総統」への忠誠を示す式典にはもはや参加することが許されなかった。そして、そのことは事実上の免職を意味した。⁷⁾ 5月31日、オーストリア公務員の再編規定により全てのユダヤ人、および第一級の混血児と見なされる者、さらにはユダヤ人ないしは第一級の混血児と結婚している者は全員退職させられた。⁸⁾

高等教育に関しても4月23日、文科省は国内のユダヤ人に対して大学入学制限を行ない、ユダヤ人学生は入学許可証を得た場合しか大学へ入学できなかった。またユダヤ人学生の学位取得は1937/38年の学期終了までしか認められず、また学位取得の式典も行なわれなかった。また医学生たちは学位取得の際には「ドイツ・オーストリアの国家領域内での医療行為を断念する」という宣誓書を提出しなければならなかった。⁹⁾

1938年11月11日、大学の学長たちにはユダヤ人聴講生に大学構内への立ち入りを禁止する権限が与えられた。¹⁰⁾

また初等・中等学校のユダヤ人の生徒たちの一部は、クラスでは指定された「ユダヤ人専用」の椅子に座らされ、「アーリア人」の同級生たちから隔離された。さらに4月27日にはユダヤ人生徒と他の生徒を完全分離するため、「純粋ユダヤ人」用に8校の中等学校の設立が決定され、5月9日にはこの措置は義務教育の学校にも拡大された。¹¹⁾ さらに1938/39年の学期が過ぎると、ユダヤ人の子弟に対する公的な授業はすべて禁止された。¹²⁾

1938年5月20日、オーストリアでニュルンベルク法が効力を有し、7月23日以降は15歳以上の全てのユダヤ人には、「ダビデの星」の「目印」を付けることが義務付けられた。さらに数週間後の8月17日には、ユダヤ人の姓名に関する命令が出され、ユダヤ人は1939年1月以降は自分の名前と名字の間に、女性は“Sara”、男性は“Israel”という名前を追加しなければならなくなった。¹³⁾

1938年8月5日にはウィーン警察署長の命令で、市内の大半の公園へのユダヤ人の立ち入りが禁止された。またユダヤ人の医師は1938年9月30日をもって医師の開業免許を取り上げられ、それ以降は「ユダヤ人の患者治療者」としか名乗ることが許されず、ユダヤ人以外の治療に当たることは禁じられた。しかも、こうした「患者治療者」の数は制限され、ユダヤ住民1200名に対して1名の「患者治療者」しか許可されなかった。¹⁴⁾

「併合」後、すぐに大半のユダヤ人労働者及びサラリーマンは職を失った。¹⁵⁾ そうすることでナチズム体制指導者たちは約20万人いたアーリア人失業者に職を得させようとしたのだった。このためにユダヤ人の貧困化は急速に進み、さらにそれに追い打ちをかけるように住居のアーリア化も進められた。「併合」時点でウィーンに7万戸あったユダヤ人の住居は1938年12月には2万6千戸にまで減少し、¹⁶⁾ ユダヤ人の多くは親類や知人の元に身を寄せざるをえなかった。彼らはまた僅かな蓄えも使い果たし、家具や身の回りの品々を切り売りし、最後には「ユダヤ教徒共同体」¹⁷⁾ の保護を受けねばならなかった。多くのユダヤ人にとって、「ユダヤ教徒共同体」が毎日一度提供してくれる食事が唯一の定期的な食事となった。「当座は我々もためらっていた。しかしお金が底を尽き、我々は〈ユダヤ教徒共同体〉に登録し、毎日食事をもらいに行った(。。。)創造的な人間が物乞いに落ちぶれてしまったのだった」と、あるユダヤ人は語っている¹⁸⁾。

多くのユダヤ人にとってさらに深刻だったのは社会的な孤立に耐えねばならないことだった。彼らは非ユダヤの友人や隣人、知人たちから突然挨拶もされなくなってしまった。そのような事態を経験し、後に国外に逃れて生き延びたユダヤ人は、「併合」と逃亡の間の期間を「真空」ないしは「自国内での亡命」と呼んでいる。¹⁹⁾

1938年12月3日、ユダヤ人財産没収に関する新たな命令が出され、まだ存続していたユダヤ人が経営する企業の強制的閉鎖、さらには現金や有価証券の没収が行なわれた。翌年の2月21日にはユダヤ人の財産申告に関する新たな命令が出され、ユダヤ人住民は2週間以内に所有している全ての金、銀、プラティナ、ないしは宝石類を当局に引き渡さねばならなかった。²⁰⁾ 4月からはユダヤ人に対する貸付人保護が効力を失い、ウィーンの特典区内でのユダヤ住民のゲットー化が開始された。

オーストリアからの最初のユダヤ人の強制収容所への移送は1938年4月1日に行なわれ、151名の「保護検束者」がダッハウへ送られた。その内の60名がユダヤ人だった。ウィーンの実務警察命令で1938年5月には2千名のユダヤ人が拘束され、ダッハウなどの強制収容所へ移送された。²¹⁾ 当初、ナチスの基本政策はユダヤ人を強制的に出国させることだった。しかしユダヤ人を受け入れてくれる国はほとんどなく、オーストリアの併合、さらにはポーランドへの侵攻により、逆に多くのユダヤ人がドイツ領内へ入ってくるようになった。それに対処するため、ユダヤ人の大量殺戮が開始された。それは1941年のソヴィエト進行直後と思われる。大量殺戮実行のため銃殺などによる原始的な殺戮方法から最新技術による殺戮方法が開発されていくことになった。1941年末にはアウシュヴィッツ・ビルケナウとベウジェッツに絶滅収容所の建設が開始され、また改造されたトラックの中でエンジンの排気ガスを導入したガスによる最初の殺戮も行なわれた。そして1942年1月20日、帝国保安本部のあるヴァンゼーでの「ヴァンゼー会議」で「ユダヤ人問題の最終解決」が決定され、ユダヤ人の組織的殺戮が開始されることになった。

「併合」時にウィーンにいた約18万のユダヤ人の内、3分の2にあたる約12万人は移住に成功したが、残りの約6万人は「ユダヤ人問題の最終解決」の犠牲となったと言われている。²²⁾ 1944年にウィーンに残っていたユダヤ人は僅か5800名程度で、その大半はドイツ人との「混血児」だった。

そして戦争終結の1945年まで生き残っていたユダヤ人は僅かに1700名程度だった。²³⁾

2. 子供時代から青年時代

アーロン・メンツァーは1917年4月18日に6人兄弟の4番目の子供として生まれている。両親は世紀転換期にハプスブルク帝国東部のガリシアからウィーンにやって来て、ウィーン2区に住んでいたが、当時その地域には多くのユダヤ人が移り住んでいた。両親は共に宗教熱心でウィーンのレオポルトシュタットにあった教会のミサに定期的に参加していた。父親は貧しい皮革商人だったため、長男レオしか大学で学ぶことはできなかった。彼はウィーン大学で学位も取得し、ウィーンの「ユダヤ教徒共同体」の教師となり、1920年代には、あるシオニズムの青少年連盟の会長を務めている。²⁴⁾後にパレスティナへ渡ってからも、当地のギムナジウムの校長を務め、各地でユダヤの歴史やシオニズムの歴史に関する多くの講演なども行なっている。²⁵⁾

他の息子たちは16歳で中等学校を卒業すると、すぐに働き始めた。敬虔な両親の影響、さらには教会の影響を受けた子供たちはほぼ全員が短期間、ユダヤ教の宗教団体に所属し、さらに次男、三男は1927年にウィーンでのシオニズム・社会主義的青少年運動「ゴールドニア」の共同設立者になった。後には弟たちもそれに所属した。²⁶⁾

「ゴールドニア」は1923年にガリシアでマルクス主義的な団体「ハショメール・ハザイル」の穏健な分派として設立された。グループの名前の由来の人物はアーロン・ダヴィッド・ゴルドンで、彼は1856年にロシアで生まれ、1922年にパレスティナで亡くなっている。彼は「勤労による救済」を説き、宇宙、自然、人間の一体化を説いた。彼はまたトルストイの影響を受け、あらゆる暴力を否定している。彼はパレスティナでの新しいユダヤ人の生き方をこう述べている：

「我々が今日望んでいるのはアカデミックな文化ではなく(。。。)生きるための文化である。我々は生きる哲学を、生きる芸術を、生きる詩を、生きる倫理を、生きる宗教を創造しようと思っている。そしてこう付け加えても良いだろう：現在と過去との間に生きた橋を架けるのだと。」²⁷⁾

中等学校を出るとアーロンは様々な会社で働いた。同時に旺盛な知識欲を発揮し、独学で様々な学問を学んだ。彼はまた「ゴールドニア」ですぐに人生の目標を見出し、ヘブライ語を習得し、ユダヤ史、シオニズム史などを学んだ。

「ゴールドニア」は宗教的な団体ではなかったが、ユダヤの伝統は守っていた。当時13歳の少年だった人物が「ゴールドニア」で催された、ある式典のことを覚えている。式典では歌がうたわれ、朗読が行なわれ、アーロンがテキストを平易な言葉で子供達にも理解できるように説明した、と言う。その式典やアーロンの話は参加した子供たちには忘れられない思い出となった。²⁸⁾

アーロンは若くして聴衆の心をつかむ才能を有していたのだった。

3. 「青少年アリヤー」での活動

1938年6月、ウィーンに“Jugend-Alijah”「青少年アリヤー」（以下JUALと記す）が設立されることになった。「アリヤー」とはヘブライ語で「上昇」を表す言葉で、パレスティナへの移住を意味しているという²⁹⁾。またこの組織はそもそもは1932年に女性教育学者のR.フライアーによってベルリンに設立されたものである。その目的はユダヤ人青少年たちに将来パレスティナへ移住した後に、現地で生活していく上での農業や様々な手工業の基礎技術を身に付けさせるものだった。

パレスティナへの移住を希望する青少年たちは青少年連盟のメンバーでなければならなかった。青少年連盟はJUALと共同でパレスティナへの移住許可証を与えるに相応しい青少年たちを選び出した。許可証を手に入れるには医師による健康診断書に問題がないこと、さらにJUALが運営している学校及び「ハッハシャラー」（ヘブライ語で「鍛練」を意味する。パレスティナ移住の前提条件としての農業と手工業を学ばせる施設）³⁰⁾の修了証が必要だった。

JUALの教育プログラムは主として二部から構成されていた。一つは週20時間にわたる、ヘブライ語、ユダヤの歴史、パレスティナに関する授業、文学、衛生学、芸術史、数学、物理などを含む理論的授業、もう一つは機械修理、板金、家具製作、仕立業などの実習だった。³¹⁾ 授業は個々の青少年連盟の指導者、および反ユダヤ主義の追放令によって正規の学校業務から締め出された教員などによって行なわれた。この二つの教育プログラムは、それぞれ約三ヶ月間続いた。その後で青少年たちはようやく「ハッハシャラー」を、すなわち農家や工場での実習を開始することができた。1938/39年に「ハッハシャラー」キャンプはとりわけニーダーエスターライヒ（低地オーストリア）州に設置され、JUALのメンバー、ないしは他の青少年連盟のメンバーがそこへ送り込まれた。

青少年たちは平均して4週間、大半はユダヤ人所有者から没収された農場で生活した。彼らは畑や家畜小屋、あるいは工場での労働に従事し、それと並行して農業理論などの授業も受けた。毎日の労働時間は6時間だったが、収穫時期にはさらに数時間延長して働かねばならなかった。³²⁾ しかし労働時間以外は比較的自由で、自分たちの青少年活動を行なうことができた。

1939年には860名の青少年たちが「ハッハシャラー」を修了した。³³⁾

「ハッハシャラー」キャンプは国内だけでなく、イギリスやデンマーク、スウェーデンにも存在したという。JUALは既にパレスティナで生活している親類の者たち（彼らは親類の子供や青少年たちを受け入れる義務を負っていた）がいるために移住許可証を有している子供や青少年たちの世話もした。彼らはJUALで将来のパレスティナでの生活の準備としてパレスティナに関する授業も受けることができた。

1938年5月から1940年2月の間にJUALの助けをかりて、2200名の青少年がパレスティナへ、ないしは途中の滞在地、例えばデンマークないしはイギリスへ旅立った。³⁴⁾ こうしてJUALの生徒数は移住によって徐々に減少し、例えば1939年にはJUALで学んでいたのは1610名だったという。³⁵⁾

元JUALメンバーで、戦後「ユダヤ教徒共同体」の所長を務めたP.グロス氏は、戦後、アーロンの思い出集の序言としてJUALのことをこう記している：

「JUALの建物があったマルク・アウレル通り5番地は1939年から1941年まで、私にとって真

の避難所だった。そこで半日の授業の枠内で、ユダヤの歴史や文学、宗教についてしっかりと学び、私のユダヤ人としての自己理解に役立った。JUALでは移住のための実際的な準備として、短期間で職人の手仕事を身に付けることが可能だった。私はさらに電気技術、機械工、ブリキ職人のコースで学んだ(。。。)。振り返ってみると、JUALは少年としての私の成長(。。。)、後の人生に於ける私の態度に決定的なインパクトを与えたのだった。」³⁶⁾

JUALの活動はしかしながら将来のパレスティナでの生活のための単なる準備の場だけでなく、ユダヤ人の子供や青少年にとって心の拠り所でもあった。大学などの上級学校へ進んで学習する可能性も、職人下での徒弟教育を受ける可能性もない14歳の義務教育を卒業した彼らに理論や実習を学ばせただけでなく、彼らを不良化から救い、怠惰な生活から救ったのだった。またJUALはとりわけ彼らに生きる喜び、少なくとも数時間は煩わされることなく若者でいることが許される、との安心感を与えたのだった。当時JUALで学んでいた人物は「我々はその年齢の普通の人間が感じるように、感じていた。それはそもそも与えられうる最高のものだった、と私は信じている」と回想している。³⁷⁾

4. 「青少年アリヤー」の指導者へ

JUALの活動がベルリンのモデルに習って体系化され、JUALおよび再教育コースが拡充されたとき、アーロンは指導部の一員となり、さらに1938年10月20日、JUALの7部局の担当者の一人に初めて選ばれた。

1939年2月、アーロンはJUALの青少年たちのグループを率いてパレスティナを訪問し、かつての教え子たちをキブツに訪ねた。ハイファではこの間に当地へ移住していた両親と4人の兄弟と再会した。両親たちはアーロンのパスポートを隠すなどして、アーロンにそのままイスラエルに留まるよう説得した。しかし彼は、ウィーンにユダヤ人の青少年たちが残っている間は自分は彼らの元にはいなくてはならないのだ、と主張し、譲らなかつた。4月の帰国の際に末弟とトリエステで会った際に、その地からパレスティナへ船で渡ることになっていた末弟は、一緒にパレスティナへ行くようアーロンに求めたが、彼は断わり、ウィーンに戻って行った。

アーロンはその後もジュネーブにいた知人を介してパレスティナの両親や兄弟と手紙のやり取りを行っていたが、彼らが近い内にパレスティナへ来るようにと再三アーロンに求めたが、アーロンはそれには返事を書かなかつた、という。³⁸⁾

第二次大戦勃発後の1939年9月12日、アーロンは「シオニスト青少年同盟」の枠内でJUALの新しい指導者、かつJUAL併設の学校の責任者となった。しかしその直後に困難な課題に直面した。大戦勃発後、オーストリアのユダヤ人の国外移住の可能性が劇的に低下したのだった。ドイツと戦争状態にあった全ての国々はオーストリアからのユダヤ人に対して門戸を閉ざしたからである。イギリスはドイツのユダヤ人の受け入れを拒否し、彼らを「敵性外国人」と規定した。この措置はイギリスの委任統治領パレスティナにも適用された。しかしながらユダヤ人たちは移民許可証を持たないまま非合法での移民を開始した。「新シオニズム組織」のユダヤ行政局は当初は非合法の移民には反対の立場だったが、戦争勃発後に、ヨーロッパのユダヤ人の状況がますます絶望的になったと

き、いわゆる非合法の移住をも支持することにした。³⁹⁾ その際の移住のルートはフィウメないしはトリエステからユーゴやギリシャを経由してパレスティナへ向かう、というものだった。1939/1940年にイタリア、ユーゴ、ギリシャの通過ビザの取得が困難になると、ドナウ河を下って行くルートも採用された。⁴⁰⁾

1939年11月、ついにJUAL指導部も非合法で移民させる苦渋の決断をした。そうすることで可能な限り多くの青少年たちを中立国経由で、とりわけスカンディナヴィアの国々を経由してパレスティナへ送り込もうとした。⁴¹⁾ しかしこの件ではスイスのジュネーブにあったJUALのヨーロッパ本部との軋轢を招いた。本部は非合法での移住措置に同意しなかったのである。アーロンは非合法による移民決断の翌月の12月、本部宛に手紙を書いている：

「私は、またこの件に同意した他の仲間全員は、この方法が新たな非常にややこしいものであることは認識しています。しかしそれでも我々はこの方法を取ったし、この120名の青少年を送り込まない責任を負うよりも、むしろこの解決方法に責任を負うことができると思うのです。」⁴²⁾

しかし一方で「非合法」での移住の費用は2倍、3倍に膨れ上がり、JUALの財政は著しく悪化した。この間もJUALは非常に粘り強く教育活動を維持していた。しかし青少年たちは「ハッハシャラー」を修了しても移住の可能性が全くなく、それどころか彼らの両親の強制移住によって時には住む場所もなかった。そのためかつての「ハッハシャラー」の期間を延長し、いわば中級の「ハッハシャラー」を導入することが必要となり、「ハッハシャラー」は数ヶ月間延長されることになった。青少年たちはそのことによって有意義な活動に従事しただけでなく、衣食住の比較的恵まれた待遇を受け、アリア人による暴力からも保護された。しかしその後も移住の可能性がなかったため、1939年秋にはいわゆる上級コースが設けられることになった。例えば押収されたロスチャイルド農園での園芸作業でのコースがそれだった。青少年たちはそこで午前中は農園で働き、午後はJUALの学校で学んだのだった。

そうした上級コースや「ハッハシャラー」キャンプで青少年たちは少なくとも2、3週間はユダヤ人に敵対的な環境から護られ、煩わされることなく健全な環境で生活できたし、もしかすると移住できるかもしれない、というかすかな希望も持つことができた。

1940年になると、当局によって徐々に「ハッハシャラー」キャンプは解体されることになった。アーロンは1940年1月に「我々は将来の移住許可証に関してはそれほど楽観主義的でないし、青少年たちももうそれを当てにはしていない」と認めてはいるが、心底では将来のパレスティナへの移住、それに応じた教育の必要性を感じていた。アーロンは1940年3月の「ユダヤニュース新聞」の記事の中でもその必要性を強調している：

「ウィーンのユダヤ人の青少年は数年前から一つの目標、すなわちパレスティナへの移住という目的を有している。彼らはまたこの目標をしっかりと掴んでいる。新しい故郷で、特に我々の目的地パレスティナで生活できるように、我々は多くのことを学ばねばならない。我々はそれ故に移住に向けて徹底的に準備するつもりである。我々はユダヤ性とその精神的財産を引継ぎ、目的地の言語や必要不可欠な事柄を獲得するつもりである」⁴³⁾。

アーロンに指導されたJUALは、ユダヤ人青少年に生きる希望や夢をプレゼントしたのだった。

JUAL の元メンバーはこう回想している：

「我々はより良い時代に対する確信と希望とを、パレスティナへの〈アリヤー〉への確信と希望とを、快適で、健全で、普通の生活を送るという確信と希望とを見出した。」⁴⁴⁾

また別の元メンバーもこう記している：

「特に重要だったことは、我々是一日中 JUAL の活動に参加していて、何もせずにぶらぶらすることなどなかったことである。(。。。) そこで私は多くの友人を見つけ、あの恐怖の時代に極めて幸せな時間を過ごしたのだった。そしてあれから数十年後の現在、全てはアーロン・メンツァーの功績だったと私は確信している。」⁴⁵⁾

1940年11月、アーロンは15名の JUAL の子供たちを連れてグラーツへ行き、子供たちをユーゴスラヴィアの国境を越えてザグレブに密入国させた。その頃、ドイツの JUAL の設立者である R. フライアーがドイツのユダヤ人指導者との対立からドイツを去り、ユーゴスラヴィアで多くのユダヤ人亡命者たちをザグレブや、さらにはパレスティナへと送り込んでいた。この15名のメンバーの一人だった E. ペリはその折のことをこう記している：

「私達15名の幸運な者たちはアーロンに連れられて電車でグラーツへ向かった。道中はずっと歌をうたい、様々な体験を語り合った。それは1940年11月21日のことだった。アーロンは私たちを密輸業者の住まいに連れて行き、リストを手渡し、別れを告げた。私は涙が流れた。彼が私にキスをしたのは、それが多分最初だった。私は4ヶ月間ザグレブに滞在したが、ウィーンとは絶えず連絡を取っていた。アーロンからの最後の手紙を受け取ったのは1941年2月だと思う。お元気ですか、という私の質問に〈私は生きているし、生きていることで満足しています〉と答えてくれたのを今日のようにありありと覚えている。それ以上のことは何も知らされなかった。私の中ではアーロンは人間性に満ちた英雄の一人である」⁴⁶⁾。

さらに E. ペリはこう書いている：

「アーロンの行動は自由意志から生じたのだった。というのも彼は、他の多くのシオニズムの幹部同様に、その気になればとっくにパレスティナで生活することができたのだから。しかし彼は戻ってきた。ウィーンに留まることは道徳的な義務だと感じたのだった。」⁴⁷⁾。

JUAL はユダヤ人青少年のために大いなる働きをなしたが、その裏で JUAL は大きな財政問題と闘わねばならなかった。「ユダヤ教徒共同体」は JUAL の費用のかなりの部分を負担していたが、1940年に負担の大幅な削減をしようとした。この件を巡って「ユダヤ教徒共同体」の所長レーベンヘルツとアーロンとの間に激しい議論が交わされた。

ユダヤ人の急速な貧困化により、「ユダヤ教徒共同体」は包括的な救済活動を行なわざるをえなかった。「ユダヤ教徒共同体」は、ユダヤ人の子供や青少年のために職業訓練を行ない、延べ4万2

千名の参加者があったという⁴⁸⁾。また一連の社会施設（乳幼児ホーム、みなしごホーム、老人ホームなど）の維持管理も行なった。遂には大人たちの多くも住まいや食事の援助を「ユダヤ教徒共同体」に求めるようになり、「ユダヤ教徒共同体」が支給した給食により、毎日約3万6千人が飢えをしのいだと言う⁴⁹⁾。最終的にはアーロンは、JUALがそれまでの枠組みで活動するための費用を「ユダヤ教徒共同体」が負担する、との回答を得た。

同じ頃、アーロンに最後の個人的な、喜ばしい出来事があった。すなわち、ベルリン在住のユダヤ人女性ロッセ・カイザーとの婚約である。アーロンは1940年に数度ベルリンを訪れ、そこで現地のJUALの会議やその他の団体の会議に参加し、彼女と親しくなった⁵⁰⁾。J. シュヴェアゼンツは1988年にベルリンで出版した『隠れたグループ。あるユダヤ人教員がドイツを回顧する』の中で、アーロンが後に彼女と婚約した、と記している⁵¹⁾。またかつて彼女と同じ工場で働いていた人物はこう記している：

「彼女は魅力的で、私はとても彼女が気に入っていた。彼女は白のブラウスに青のスカートをはき、非常に素敵な服装をしていて、とても愛らしい少女だった。彼女はとても理想主義的だった、いや理想主義的過ぎた。彼女はとてもてきぱきしていて、何でも非常にまじめに実行した」。⁵²⁾

アーロン自身は、理由は不明だが、この重要な出来事をウィーンの仲間には誰にも知らせてはいないようである。恐らく二人は1941年の年の瀬に彼がベルリンに滞在した折に婚約したようである。しかしながら二人は結婚することもなく、アーロンがアウシュヴィッツへ送られる約半年前の1943年3月、ロッセはアウシュヴィッツへ移送され、生きて再び戻ることはなかった。

5. 終焉に向かって

第二次大戦の勃発により労働力不足が加速したが、ユダヤ人たちが習熟していた以前の職業に就くことは望ましくないとされ、道路建設、ゴミ撤去作業など、いわゆる「奴隷仕事」と呼ばれた労働にのみ駆り出された。⁵³⁾

1939/1940年以降、多くのユダヤ人青少年たちも労働に駆り出された。1940年6月27日、アーロンは「ユダヤ移民センター」の命令で強制労働へ徴募された25名のJUALの青少年たちと共に自発的に上部オーストリアのドップル労働キャンプへ赴いた。⁵⁴⁾「ユダヤ移民センター」は1938年の夏に悪評高いナチス親衛隊のユダヤ人問題担当者であったA. アイヒマンがウィーンで設立したもので、オーストリアのユダヤ人追放を「効率的」に行なうための機関だった。

ドップル労働キャンプは「ユダヤ移民センター」の監視下にあり、段ボール工場や農場があった。アーロンたちはそうした工場や農場での作業に駆り出された。⁵⁵⁾

3週間後、「ユダヤ移民センター」の命令を受けてウィーンに戻ってきたアーロンは、すぐにユダヤの祭り「タームス祭」の準備に取り掛かった。祭りは7月に「ユダヤ教徒共同体」所長夫妻やその他のユダヤ教徒団体の代表者たちも参加して盛大に行なわれた。しかしそれが最後の祭りとなった。「ユダヤ・ニュース新聞」は、この厳かな、かつ感動的な祭りの様子を伝え、「感動的な祝祭の

ハイライトは JUAL 指導者アーロン・メンツァーの行なった祝祭演説だった」と締めくくっている。⁵⁶⁾

さらに9月1日、アーロンはウィーンの JUAL メンバーと共に、シオニズム青少年運動のこれまでの活動に関する展示会を開催した。展示会のタイトルは「活動と道」とされ、JUAL の様々な活動を紹介した。アーロンは展示会用パンフレットの中でシオニズム青少年運動の課題と、その目的についてこう記している：

「非常に大事な目的は、移住前にユダヤ人の子供や青少年たちを、自ら進んで働き、かつユダヤ人を自覚した人間に作り上げることである(。。。)彼らは古い文化国民の将来を担う世代であり、彼らには歴史的な運命が、勇気、知識、目的意識、とりわけ揺るぎない自信を必要とする課題が課せられていることを自覚させる、という目的である(。。。)。屈従し、意気喪失した青少年を、活力に満ち、自分の価値を信じ、自分の民族と共同体のために責任感溢れた、新しい若いタイプの人間に変えねばならないのである。こうした若い人間を先ずは現代のユダヤ人改革運動に結び付けねばならない。この運動は太古の故郷の大地への民族の帰還を目的とするものである。」⁵⁷⁾

JUAL の展示会は青少年に生きる意義と明るい将来に目を向けさせるイベントとなったが、しかし最後のイベントでもあった。

1941 年春、ゲッターへの移送が開始されたとき、JUAL のメンバーたちは不安にかられたが、実際の移送の意味を知る者は誰もいなかった。あるユダヤ人の証言によれば、多くの青少年は移送開始の際に、ポーランドのユダヤ人は特定の地域内に住まわされ、労働に動員されていると信じており、中には自発的に申し出る方が良いのでは、と真剣に考える者もいたという。⁵⁸⁾

しかしながら次第に青少年たちの間にある予感が広がっていった。ナチスの言い方に倣えば、「疎開させられた」ないしは「住む場所を替えられた」友人たちはもはや生きてはいない、との予感である。ある少女は日記にこう書いている：

「私たちの誰もが今日ないしは明日には消滅してしまうかもしれない。延期されたことは中止されたことではない。遅かれ早かれ私たちは全員リッツマンシュタットないしは他のゲッターへ行くことになるだろう。」⁵⁹⁾

1941 年5月9日、アーロンは「ユダヤ移民センター」から、150名の少女を選抜し、マグデブルク近郊の農場へアスパラガスの収穫作業の強制労働に就かせるように、との指示を受けた。5月16日の夕方、JUAL のメンバーは、強制労働へ赴く少女たちとの別れの会を開いた。アーロンはその会で少女たちを勇気づけ、今回の強制労働は「ハッハシャラー」だと思ふようにと諭し、「パレスティナで再会しよう」との言葉で別れを告げた。アーロンはさらに彼女らに向けてノートにこう書いている：

「君たち全員は収容所に入り、これからの数週間、労働生活を送ることであろう。その労働生活を送る中で君たちは苦勞するだろう。しかし我々を結び付け、一つにしているものを維持する

だけでなく、継続させ、深めなければならない。私は君たち全員を信頼している。君たち全員が君たちの態度や労働でその信頼に応えてくれるなら、私は幸せになるだろう。強くあれ！君たちのアーロン・メンツァーより。」⁶⁰⁾

別れの会の4日前の5月12日、「ユダヤ移民センター」は「シオニズム青少年連盟」および JUAL に対して4日以内に解散するよう命じた。ユダヤ人絶滅政策が進むこの段階ではそうした組織はもはや利用価値はなくなったからだった。それによって JUAL メンバーの子供や青少年たちは避難場所を失なうことになった。JUAL は彼らを様々な迫害から守り、人間の品位を保つ力や自覚を与えてくれていたのだった。

アーロンは JUAL のメンバーを連れて5月19日にドッブル労働収容所に赴くようにとの指示を受け取った。出発前に彼は M. フォーゲルを非合法となった「シオニズム青少年連盟」の代表と秘書に任命した。まだ移送されていなかった JUAL の青少年たちは、14歳を超えると強制労働に駆り出されたが、移送を免れた訳ではなかった。

ドッブル収容所を支配していた厳しい労働・生活条件にも関わらず、アーロンはそこでシオニズム青少年運動を継続しようと努めた。そこから未来へ向かう力と勇気を生み出すためである。そうしたアーロンに勇気づけられ、幸運にも戦後まで生き延びた一人の青年は、ドッブル収容所の雰囲気をこう伝えている：

「我々に許されている僅かな自由の中で、我々は詩を朗読し、短い文章を書いたりしたが、まだ時間があれば2、3曲歌をうたい、お互いの考えを交換し合った。それは苛酷な労働の後の僅かな文化であり、精神的昂揚だった。」⁶¹⁾

アーロンはドッブルからまだウィーンに残っていた彼の以前の秘書と連絡を取り、アスパラガス収容のためにマグデブルク近郊へ強制労働に送られた少女たちが、厳しい労働条件や飢え、さらには、しょう紅熱にも悩まされていることを知らされた。彼はすぐさま「ユダヤ教徒共同体」所長のレーベンヘルツに手紙を書き、少女たちを帰還させるべく、交渉するようにと頼んだ。そのためか、少女たちは1941年6月半ばにウィーンへ戻ることができた。⁶²⁾アーロンはドッブルからレーベンヘルツと活発なやり取りを行ない、将来のシオニズム青少年運動の再建計画（例えば強制労働施設にいる青少年のために夜間学校を設立する）を提案した。⁶³⁾レーベンヘルツはナチスの親衛隊指導者と折衝する旨、繰り返し約束したが、実際にはもはや何もできなかった。なぜならその数週間後にオーストリアのユダヤ人のゲットーや強制収容所への大量移送が開始されたからである。

1942年末にオーストリアのユダヤ人の移送は完了した。1942年12月31日にはウィーンには僅か7989名のユダヤ人しかいなかった。⁶⁴⁾1942年9月および10月には「ユダヤ教徒共同体」およびまだ存続していたシオニズム組織のほぼ幹部全員がテレージエンシュタットのゲットーへ送られ、「ユダヤ教徒共同体」は1942年11月1日に解体され、「ウィーン・ユダヤ長老評議会」に改編された。⁶⁵⁾1943年には3回に分けられ、計3700名余りのユダヤ人がウィーンから移送された。⁶⁶⁾

アーロンも1942年9月14日にドッブルからウィーンへ戻ったが、9月22日にウィーン二区のマルツガッセの集合収容所へ「入る」ようにとの命令を受け取った。

アーロンはウィーン到着の日はまだウィーンに残っていた数名の JUAL メンバーからウィーンの

ユダヤ人の状況、特に青少年運動に関しての情報を得た。

まだ移送されていなかった JUAL メンバーとの最後の集会は、安全性を考慮し、9月19日と20日の2回に分けて個人の住宅で行なわれた。その集会でアーロンは、ウィーンに於ける過去20年にわたるシオニズムの活動について語った。アーロンは全員と握手を交わし、別れを告げた。⁶⁷⁾

1942年9月21日のユダヤ教の贖罪の日（ヨム＝キプル）の前夜、教会でのアーロンとの最後の別れがやってきた。彼は翌朝集合収容所に出頭することになっていた。M. フォーゲルはその折のことを報告している：

「我々は短く握手を交わし、2、3言葉を交わし、目を見つめ合っただけだった。それ以外は何もなかった。仲間全員がこの瞬間の厳粛で責務を負った意義を理解していた。アーロンは私たちが認めていたように、再びウィーンのシオニズム運動の象徴となり、中心となったのだった。」⁶⁸⁾

9月24日、アーロンはテレージエンシュタットのゲッターへ移送された。彼の移送の2、3日後、ウィーンから JUAL のメンバーたちが移送されてきた。アーロンは彼ら一人一人と握手を交わし、歓迎したという。その時移送された当時15歳の少年は、アーロンは丸坊主にはされてはいなかったが、髪の毛はずたずたに切られ、体調も悪いようだった、と回想している。⁶⁹⁾

テレージエンシュタットのゲッターへ到着すると、アーロンはすぐにユダヤ人のゲッター自己管理局によって創設された青少年保護課で働き始めた。JUAL のメンバーで、テレージエンシュタットのゲッターの囚人だった若者がアーロンの活動について報告している：

「アーロンはテレージエンシュタットのゲッターには僅か12ヶ月しかいなかった(。。。)。この比較的短い期間にも関わらず、彼は多くの素晴らしいことをなしたのだった。彼は多くの若者たちの心構えを強固なものにし、この非常に困難な時期に彼らに希望と目標を与えたのだった。彼はまたこうした混沌とした時代状況の中で青少年のために明白な秩序と組織を創造したのだった。多くの指導者たち(。。。)からもアーロンの働きは高く評価された。」⁷⁰⁾

1943年10月6日、6週間前に送られてきていた3歳から14歳のユダヤ人の子供たち1260名、および子供たちの世話にあたった53名の囚人たちはテレージエンシュタットのゲッターから突然移送された。その囚人たちの中には作家フランツ・カフカの妹も含まれていた。移送先はスイス、ないしはパレスティナとの触れ込みだった。しかしヶ月後の11月7日、彼らが到着したのはアウシュヴィッツ絶滅収容所だった。彼らは到着後、ただちにガス室で殺害された。アーロン、26歳の時だった。⁷¹⁾

おわりに

以上、ドイツによるオーストリア併合直後から開始されたユダヤ人迫害の嵐の中で、ユダヤ人青少年の教育に生涯をかけたアーロン・メンツァーの短い生涯を追ってきた。自らも殺害されること

を予感しながら、一人でも多くの青少年たちに未来への希望と夢を抱かせるために最後まで勇敢に闘ったアーロンの生涯は、我々に大きな感銘を与えるものである。と同時に改めてナチスによるユダヤ人迫害の残虐性と理不尽さを思い知らされる。2008年にアウシュヴィッツ絶滅収容所を訪問した際には残念ながらまだアーロンの存在は知らなかったが、他の絶滅収容所でもアーロンのような人物が殺害されたのであろう、と思われる。

最後に JUAL でアーロンと出会った一青年の回想の一部を挙げておこう。

「アーロンの名前はウィーンでは非常に多くのユダヤ人に知られていた。誰もが彼のことを知っていた：中肉中背の、がっしりした若者、彼は JUAL を指導し、さらにはウィーンの青少年の間でのシオニズム運動の牽引者だった。23 歳にもならない若さで彼はこの学校の指導部を引き受けた。それも明日何が生じるか分からないような混沌とした時期にである。(。。。) 彼は、小さな悩みを抱えた青少年の話聞き、彼らの心の負担を軽減しようとした。何が生じようとも、どれほど困難に思われようと、彼は屈することはなかった。」⁷²⁾

注

- 1) 2008 年 8 月から在外研究員として半年間ウィーンに滞在したが、その折に「オーストリア抵抗運動資料館」の研究員である E. クランパー氏とドイツによるオーストリア併合後のウィーンのユダヤ人の問題に関して何度か意見交換を行なう機会を得た。その折に氏からユダヤ人青少年指導者アーロン・メンツァーの事を知らされ、彼に関する氏の論文、および幾つかの新しい資料等を紹介して頂いた。本論文はそうした氏との意見交換や、以下に記す氏の論文などを参考にして完成したものである。また本論文執筆にあたり、何度かメールによるアドバイスを頂いた。ここに改めて氏へ感謝の意を表したい。
Klamper, Elisabeth: "Auf Wiedersehen in Palästina" Aron Menczers Kampf um die Rettung jüdischer Kinder im nationalsozialistischen Wien. Wien, 1996.
- 2) Ebd., S.10.
- 3) Lachs, Mina: Warum schaust du zurück? Erinnerungen 1907–1941. Wien/München/Zürich 1986, S.112.
- 4) Ebd., S.117.
- 5) Rosenkranz, Herbert: Verfolgung und Selbstbehauptung. Die Juden in Österreich 1938 bis 1945. Wien/München 1978, S.27.
- 6) Klamper, a.a.O., S.14.
- 7) Ebd., S.16.
- 8) Zionistische Rundschau, Nr.4, 10.6.1938.
- 9) Universitätsarchiv Wien, 722 ex 1937/38.
- 10) Universitätsarchiv Wien, 901 ex 1938/39.
- 11) Botz, Gerhard: Wien vom "Anschluss" zum Krieg : Nationalsozialistische Machtübernahme und politisch- soziale Umgestaltung am Beispiel der Stadt Wien 1938/1939. Wien /München 1988, S.243.
- 12) Ebd.
- 13) Benz, Wolfgang (Hrsg.): Die Juden in Deutschland 1933–1945. Leben unter nationalsozialistischer Herrschaft. München 1988, S.601.
- 14) Rosenkranz, a.a.O., S.126.
- 15) Klamper, a.a.O., S.18.
- 16) Ebd.
- 17) ウィーンに居住するユダヤ教徒によって設立された自治的共同体。正式団体名は Israelitische Kultusgemeinde Wien.

- 18) Klamper, a.a.O., S.18.
- 19) Ebd.
- 20) Ebd., S.19.
- 21) Ebd., S.16.
- 22) Israelitische Kultusgemeinde Wien (Hrsg.): Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, S.39.
- 23) Ebd., S.40.
- 24) Ebd.
- 25) Ebd.
- 26) Ebd., S.9f.
- 27) Ebd., S.41.
- 28) Ebd., S.9f.
- 29) Klamper, a.a.O., S.7.
- 30) Jensen, Angelika: Sei stark und mutig! Chasak we'emaz! 40 Jahre jüdische Jugend in Österreich am Beispiel der Bewegung "Haschomer Hazair" 1903 bis 1943. Wien 1995, S.249.
- 31) Klamper, a.a.O., S.22f.
- 32) Ebd., S.23.
- 33) Ebd.
- 34) Jüdisches Nachrichtenblatt, 9.2.1940.
- 35) Ebd.
- 36) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.6.
- 37) Klamper, a.a.O., S.27.
- 38) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.10f.
- 39) Klamper, a.a.O., S.35.
- 40) Rosenkranz, a.a.O., S.113.
- 41) Klamper, a.a.O., S.36.
- 42) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.15.
- 43) Klamper, a.a.O., S.37.
- 44) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.55.
- 45) Ebd., S.53
- 46) Ebd., S.52.
- 47) Ebd., S.51.
- 48) Jüdisches Nachrichtenblatt, 22.4.1940.
- 49) Jüdisches Nachrichtenblatt, 6.6.1940.
- 50) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.12.
- 51) Ebd., S.11.
- 52) Ebd., S.12.
- 53) Klamper, a.a.O., S.40.
- 54) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.18.
- 55) Klamper, a.a.O., S.40.
- 56) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.18.
- 57) Klamper, a.a.O., S.41
- 58) Ebd., S.43.
- 59) Klamper, a.a.O., S.44.
- 60) Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes E 21 930.
- 61) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.67.
- 62) Vgl. dazu: Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes E 21 930.
- 63) Klamper, a.a.O., S.47.

- 64) Ebd.
- 65) Ebd.
- 66) Ebd.
- 67) Vgl. Bericht von Martin Vogel, Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes E 21 934.
- 68) Ebd.
- 69) Trotz allem...Aron Menczer 1917–1943, a.a.O., S.13.
- 70) Ebd., S.66.
- 71) Ebd., S.37.
- 72) Ebd., S.46.

石井さんの思い出

石井さんとは私が立命館に赴任した1989年からの付き合いだった。お互いに酒好きだったこともあり、ドイツ語部会の後や、日本独文学会京都支部会の後も、よく一緒に京都の街を飲み歩いたものだった。石井さんはもともと声が大きい方だったが、酔うとさらにその声が大きくなり、「伊藤さん、それは違うよ！」と私の間違いや勘違いを何度も指摘して頂いたことを懐かしく思い出す。彼はまた非常な事情通で、多くの教員の専門領域だけでなく、個人的な情報も色々教えて頂いた。さらには専門領域外の事でも本当に詳しく、私の方から持ちかけた話題でも、石井さんがすぐに引きとって私の知らない事柄を次々と話してくれた。情報量、話す量とも私より数倍は多かったように思う。

昨年の3月末、ドイツ語部会の懇親会の席で一緒したが、その折も石井さんは実に能弁で、私などは時々相槌を打つ程度だった。「学内禁煙」が話題になった時には、ドイツ語教員唯一の愛煙家である彼はいささか憮然として、「大学が個人の領域にまで指図するのはおかしい」、といつものように大きな声で持論を展開された。それが石井さんとの最後の飲み会となってしまった。

石井さん、心からご冥福をお祈りします。

(本学経営学部教授)